二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

小説 斐芝嘉和
挿絵 高浜太郎

新 呪い屋 零 3

―淫夢迷宮―

ZERO

第一章　罠　011
第二章　自慰　030
第三章　侵蝕　048
第四章　操り人形　076
第五章　淫奴（イヌ）　107
第六章　洗脳　140
第七章　処刑　183
エピローグ　243

登場人物紹介

Characters

佐々木 零（ささきれい）

「呪い屋」の通り名で知られる凄腕の呪術師。十代半ばの容姿をしているが、年齢不詳。偽悪趣味の皮肉屋。

羽賀 御影（はがみかげ）

羽賀大社の跡取り娘。星辰学園在籍時は、羽賀退魔社を組織しＯＲＧＡＮＯＮと戦った。

陳 青龍（ちんせいりゅう）

秘密結社「ＯＲＧＡＮＯＮ」の幹部。零たちの敵。

一ノ瀬（いちのせ） ジョスリン

古代密教を伝える一族の子孫。警察呪術大学高等部一年生だったが、陳に懐柔されてその部下になった。

『第二章　自慰』より

（せ、青龍の呪か⁉　なんでいままで気づかなかった⁉）
見下ろせば、素足。駅からここまで、靴もなしに歩いてきたというのに、どうして気づかなかったのか――もちろん、呪に捕らえられていたからだ。ニヤニヤじろじろ見つめてくる野次馬を、いままでまったく不審に思わなかったのも、すべては青龍の、いやらしい呪いのせい。
（い……いつから⁉　いつからアタシは、この恰好なんだ⁉）
慌てて記憶を探ったが、どうしても思い出せない。すでに一度この街に至り、ジョスリンと遭遇して倒された記憶も、綺麗サッパリ消え失せている。
その間にも、いやらしく笑み崩れた野次馬たちは包囲の輪を狭めていた。目を血走らせた少年が、いまにも飛びかかってきそうな恰好でジリ、ジリ、と迫ってくる。
「ちぃぃ……ッ！」
恥辱に混乱し、凌辱の予感に焦った零は、後先を考える余裕もなく慌てて禹歩を踏んだ。
途端、視界がぐらりと揺らぎ――。
「くぅ……ッ⁉」
立川心眼流の呪法に反応してトラップが作動し、意図せぬ場所へ放り出される。
倒れ、転がり、パッと跳ね起きれば、そこは薄暗いビルの谷間。
行く手は高い金網に阻まれている。背後を振り返れば大通りは遙かに遠く――いやらし

く笑み崩れていた野次馬の姿はどこにもない。

「……畜生ッ！」

最悪の事態からはなんとか逃れ、悪態を吐くだけの余裕を得た。傍らの壁を拳で打った零は、裸の下半身を見下ろしてギリリッと歯軋りをする。

先ほどまではなんともなかったのに、いまは尻が寒かった。下着すら着けていない秘部には微風を感じるし、裸足の足裏にゴツゴツしたアスファルトが痛い。

（いつからだ？　いつからアタシは、青龍の呪に絡め取られていた……というか、単身で敵地に乗り込んできたっていうのに、なんでアタシは無警戒だった？　もうＺＥＲＯはいないんだ、油断してる余裕なんてねぇのに……！）

敗北の記憶を消されているから、どうしても辻褄が合わない。

それに――青龍の呪にまんまと乗せられ、人々の前で得意げに胸を張っていた自分が、どうしようもなく恥ずかしい。

「くぅぅ……そぉおっ！」

顔が熱い。頬が赤らむのが分かる。

どれほど多くのヒトに見られていたのだろうか？　写真を撮られたりしなかったか？　痴女だと思われただろうか？　あんなに胸を揺すり、尻を振って歩いていたのだから、もちろん思われただろう。

（あああ……なんてバカなんだ、アタシは……）

膨れあがる羞恥に震え、零は両手で恥ずかしい場所を隠そうとした。いまさらそんなことをしても無駄だが、なにもしないではいられない。

だが――ダメだ。いくら指を広げても、白い肌はほとんど隠せない。秘裂を覆えば尻が無防備になってしまう。尻を押さえたら秘部の守りが疎かになる。制服やシャツの裾を一生懸命伸ばしても、プニプニした割れ目までは届かない。

（うぅ、うぅぅ……ま、待て、落ち着け！　いまここで恥ずかしい場所を隠したって、問題の解決にはならねぇだろうが！）

浮つく気持ちを抑え、零は問題の整理を試みた。

ここは敵地、青龍のフィールド。禹歩の行く先を強制転換されたように、不用意に呪を使うと余計に事態が悪化するかもしれない。落ち着くことが肝要だ。

まずは――そう。状況の把握。

ようやく思い至り、呪符を飛ばして周囲の情報を収集し始める。同時に身体をペタペタと撫でまくり、負傷の有無や全身に書き込んだ防御呪をチェックしていく。

（ン？　なんだ、これ……チッ！　書き換えられてやがる。呪ウイルスか……！）

すでに存在している呪文回路に寄生し、別のコードを挿し込んで、呪の効果を消したり変化させたりする精妙な呪法。原理は単純だが多くの術理に精通している必要があるため、

使いこなせる術師はほとんどいない。
しかし効果は絶大なので、たいていの呪術師はなんらかの対抗手段を用意している。だから零も、一応対策を立ててきたはず、なのだが――。
「……ッ⁉　ない、ない……抗ウイルス回路が、消されちまってる……⁉」
ヘソの下、抗ウイルスの呪文回路を書き込んだ場所をどんなに必死に撫で回しても、呪の気配は感じられなかった。戦闘の最中に消されないよう、呪によって真皮層に書き込んだのに――それが消されているということはつまり、気づかぬうちに一度以上、敵に捕らえられていたということ。
「ち、畜生ッ！　バカにしやがって！」
捕らえられて呪を消され、呪ウイルスを仕込まれて、再び放された――屈辱だ。生かしておいても危険はない、とハッキリ言われたようなもの。いや、玩具として、いいように遊ばれているのか。
眉を逆立てた零は股間へと手を伸ばし、淡い桜色に翳っている柔らかな肉畝に触れた。プニッと歪む弾力を指先に感じつつ、滑らかな柔肌を優しく上下に撫でて、じわ、じわ、と湧き上がる甘やかな感覚に――。
「って……な、なにやってるんだ、アタシは⁉」
息を呑むほど驚いたのに、いやらしいひとり遊びはやめられなかった。意思を無視する

指先が秘裂を開き、紅い淫唇を軽く抓(つま)む。
「うぅっ!?」
割れ目に微弱電流が湧き起こり、膝から下の感覚が急に薄れて、細い身体がふらついた。
二、三歩退き、金網に背を押し当てて、
「あぁ……ンぅぅ……」
濡れたビラビラの縁を細指の先で何度もなぞり、心地よい痺れを反芻する。
(こ、これは……これも、青龍の呪か!?)
証拠はないが、そうとしか考えられない。いかにもあの男らしい、巫山戯(ふざけ)た責め方だ。
(畜生、遠隔操作か? ……違うな、接触されている気配がない)
とすれば、呪ウイルスを仕込まれた自動防御呪の作用か。アタシを恥ずかしがらせて、防御呪をすべてリセットさせるつもりか――。
考えている間も、秘裂に潜り込んだ細指はいやらしく動き続けていた。肉ビラに滲む粘液をくちゅりくちゅりと掻き回し、細かな泡を生じさせる。火照った淫唇をしごき、伸ばして、秘裂に甘い痺れを産みつけてくる。もう片方の手は割れ目の縁に軽く触れ、女体の中でもっとも感じやすいクリトリスをトントト、トントト、と軽く叩いて――。
「く……うぅぅ……ち、ちく、しょう……!」
絞り出す声が艶やかに上擦る。

閃く快感に膝が震え、腰から下の感覚が消えていく。金網に押しつけた背が、いまにも滑り落ちそうだ。

はぁ、ふぅ、と喘ぎつつ、それでもなんとか立っていようとした零は、自然にガニ股になった。撓む金網に背を押しつけ、自らの指で掻き回している秘処をグイッと前に突き出して、まるで淫らに濡れた粘膜を幻の観客に見せびらかしているような姿勢。

目の前にいるのがふたりだけ、しかも顔見知りでよかった。先ほどの大通りでこんな状態になったら、あまりの恥ずかしさにきっと――。

「って、せ、青龍……ジョスリンッ!?　お前ら、い、いつから、そこに……!?」

いつの間にか傍にいたふたりの人物に、零はホオズキのように頬を赤らめ、掠れた声で叫んだ。

青いスーツがトレードマークの狐目の男・陳青龍と、褐色の肌に銀色の髪が美しい細身の少女・ジョスリン――呪い屋の敵は、まるで大道芸人の芸を鑑賞しているようににこやかに微笑み、仲良く肩を並べて地面に腰を下ろしていた。

ふたりの顔の高さは、膝を左右に開いて見せびらかしている零の股間と、ほぼ同じ。

（あ、あ、あああああ……よりにもよって、こいつらにッ！）

紅く潤んだ粘膜花弁を、しっかり覗き込まれてしまった。マシュマロのように柔らかな肉畝をあられもなく割り開いている、こんなにも恥ずかしい姿を――自らの指がくちゅり

くちゅりと音を立て、甘酸っぱい愛蜜をいやらしく掻き回している、こんなにも浅ましい様子を――。

羞じらう零の痴態には敢えて触れず、

「いつからって……なにやってるんだアタシは、の辺りから……でしたっけ？」

長いツインテールを軽やかに揺らし、芝居がかった仕草で首を傾げるジョスリン。応える青龍も、いやらしい笑みを深めて負けじととぼける。

「ええ、その辺りでした。それにしても、よかった。せっかく危険を冒して姿を現したのになかなか気づいてもらえないので、どうしようかと思っていたんですよ」

「ふ……巫山戯るなッ！」

カッとなって叫んだ零は左脚に体重を移し、重みの抜けた右脚を斜めに上げた。傾いだ身体の前後にくねる細腕が分かれ――左手が前から秘裂を、右手が尻のうしろから肛門を、クニ、クニ、と弄り始める。どんなに怒っても、呪に絡め取られた身体は意思を完全に無視し、勝手に動いてしまう。

（ち、畜生……ッ！　こんなこと、してる場合じゃ、ねぇのに……！）

自らの指先にマッサージされた尻穴が、少しずつ解れてきた。じんわり温かくなり、次第に気持ちよくなってくる。

「巫山戯てなんかいませんよ。なにしろ貴女は呪い屋です。防御呪を調べさせていただき

ましたが、さすがですねえ」
　羞じらい喘ぐ猫目の少女をニンマリと見上げて、青龍が言う。
「二重三重に仕掛けが施してあり、不用意に解くと呪われてしまう。だから考えたんです。御本人に解いてもらうのが一番安全で手っ取り早いだろうな、と」
「そ、それが、巫山戯てるって言うんだ……あ、うぅっ⁉」
　ヌヌッ！　と尻穴に、細指の尖端が潜り込んだ。
　閃く恥ずかしさ、同時に湧き起こる熱い肛悦。
「と……止めろッ！　この呪を、止め……ろぉおっ！」
　震えながら叫ぶが、もちろん止めてはくれない。
　汚らわしい排泄孔に潜り込んだ指は先を小刻みに曲げ伸ばししつつ、羞じらう括約筋を内側から揉み解し始める。秘裂に触れた左手は敏感なビラビラを掻き分け、その奥で喘いでいた花芯に指先を添えて――くぽ、くぽ、くぽ。
「あぅ、ああ、ンぅぅ……！」
　軽く抜き差しされた蜜壺の口に、心地よい感覚が次々と弾けた。
　意識が遠退きそうなほど恥ずかしいのに、どうしようもなく気持ちイイ。金網に預けた背が、指の動きに合わせてビクン、ビクン、と捩れてしまう。
「おやおや、顔が真っ赤ですねえ。そんなに恥ずかしいのですか？　なら、防御呪を解い

てみてはいかがです？」

「だれが、そんなこと……はぁ、ふぅぅ……ンッ⁉　く……う、あぁ……うぅぅ！」

バラバラに動いていた前とうしろの指が、次第に同調し、やがて完全に同期した。左手の指が秘処に潜り込めば右手の指が尻穴から抜け、逆に肛門を貫けば膣口から抜け――クポクポと鳴るふたつの穴に、交互に産みつけられる肉の悦び。

蠢く指に捲り返され、尻の真ン中にヌラヌラ紅い小さな華が咲いた。秘裂の潤みは溢れんばかり、淫唇は厚みを増して花弁を広げ、愛蜜の滴を垂らしつつ肉畝の外まではみ出してくる。淫核は痛いほど勃起し、包皮を自ら脱ぎ捨てて紅くプックリ、艶やかに輝く。

（と、止まれ……止まれぇっ！）

どんなに強く念じても、悦びを産みつける指先は止まらなかった。

肉穴に発した悦びは恥骨を伝って背筋を這い登り、あるいは尻房から太腿へ、膝へ――完全に蕩けた脚が、膝を外側に向けて軽く曲がり、みっともないガニ股に。己の指で弄りまくっている秘裂はますます前に迫り出して、いやらしく微笑んでいる青龍とジョスリンに、指に犯されている肉穴を見せびらかしてしまう。

「歳頃の女のコにこんなことをさせるなんて……可哀想ですよ、青龍様」

「そんなことはないよ、ジョスリン。ほら、よく見てごらん。彼女の割れ目はあんなに紅い。エッチなお汁も溢れているし、それに――あの顔。幸せそうじゃないか」

『第四章　操り人形』より

生臭い薄皮の下に、燃えるほど熱く充血した海綿体のたくましい弾力が感じられた。石でできているかのようにゴツゴツしている。心臓の鼓動がここまで響いているのか、硬い芯が微かに拍動している。

そんなこと、別に知りたくもない――のだが、操られた身体はしきりに確かめようとしていた。糸が縒れたような裏筋を、尖らせた舌先でチロ、チロ、チロ。薄皮に滲む牡エキスを、丁寧に舐め取るように。真っ赤な肉瘤のつけ根、雄々しく張り出したエラの裏側は、立てた舌の縁で切るようにしごく。

「く、うぅっ！」

呻く少年に頭をガチッと掴まれ、ここが感じやすいのだな、と身体が学んでしまった。

――れちょ、れちょ、ちゅっ！

閃く舌がカリ首を穿り、柔らかな唇が尖ってエラ縁にキス。触れるたびにペニスは強張り、木の根のように捻れた淫茎に恐ろしげな青筋が浮く。

（おぞましい……！）

頭では思うのに、胸はどうしようもなく高鳴った。粘り気を増す牡臭さに酔ったように頬が潤み、口の中には唾液が溢れて――。

「ン……あ」

広げた舌を大きく伸ばし、つけ根から亀頭まで何度も何度も舐め上げて、唾液をたっぷ

り塗りつける。垂れそうな滴には唇を押しつけ、ちゅぱ、ちゅぱ、と音を立てて吸い取って――唾液に滲んだ牡の味が、口一杯に広がってしまう。

「咥えろって言わないと、咥えないのか。面倒だな」

「そ、そうでもないぞ。俺のオチンチンに、こんなに可愛いメイドが、こんないやらしい顔をして……くぅぅ、たまんねぇなあ、この上目遣い。奉仕されるってのは、こんなに気持ちイイものなのか……よしよし、いいコだ。上手いぞ、その調子だ」

頭を撫でられた零は照れたように――もちろん自分の意思ではない――微笑み、奉仕の仕方を変えた。生臭い牡肉に開いた唇を押しつけ、軽く挟む。動かぬように固定した男根を、小刻みに舐めて、心地よい刺戟を与える。

まずは右側、根元から――ついで左を同じようにして、次第に筒先へ向かっていく。サイドを変えるとき、唾液に濡れた淫棒に頬や額、唇の端などが擦れるのは、偶然ではない。舐めまくられて熱く硬く勃起した男根は、いつも以上に感度を増している。そうして軽く触れるだけでも少年はビクッと反応。零が上目遣いに頬擦りするたび、込み上げてくる射精欲求を必死にこらえて身を強張らせ、頬を真っ赤に染めて、気持ちよさそうに呻く。

（くそ……畜生……！）

少年がうっとりすればするほど、零の臓腑は煮えくり返った。だが、己の唾液に濡れた頬は相変わらずいやらしく微笑み、淫棒に対する奉仕も熱烈さを増す。

小刻みな舌遣いで散々焦らしたあと、いったん身を離した猫目の少女は、犬のようなオスワリの姿勢に戻り、ルビーのように紅く輝く亀頭と正対する。それから少年を上目遣いに見上げ、濃紺のメイド服に包まれた細い肩を震わせて、

「くぅぅン……」

仔犬のような鼻声で鳴く。

あまりにも媚びた、浅ましい響き。恥ずかしさに心が震え、プライドがひび割れた。だが同時に、淫具に掻き回されている肉穴が燃えるように熱くなる。奥深い場所に延々と淫悦を産みつけられ、頬や唇、舌などにたくましい牡肉を感じてしまった女体が、演技ではなく欲情し始めたのだ。

バイブを咥えた膣が焦れったそうに捩れ、いやらしくくねる電動玩具に自ら絡みついていく。冷たいゴム球に揉み解された直腸は甘く痺れ、滾る男根の熱さを求めて尻穴がヒクン、ヒクン、と蠢いてしまう。

だから――。

「そんなに咥えたいのか？　しょうがねぇなあ」

言われた途端、唾液に濡れた零の頬がパァッと笑顔になったのも、演技ではなかった。思わず微笑んでから、

（ち、違う！　アタシは、そんなつもりじゃ……）

慌てて否定し、心の内で首を振ったのだが、もうダメだ。
羞じらう気持ちとはうらはらに、操られた身体がいそいそと伸びる。濡れたタイルの床に膝立ちになり、少年の太腿にたわわな乳房を押しつけるようにしながら、口を大きく開いて――あもっ！
エラを雄々しく広げた亀頭を、ぱっくり咥え込んだ。舌を圧し潰してくる熱い塊、唇に感じるたくましい肉茎。
（こ……こんな、に、も……）
太く、硬かったのか――改めて知った男根の大きさに、息が詰まった。顎関節が痛くなるほど口を開いているのに、どくん、どくん、と拍動している牡肉に口腔を埋め尽くされてしまう。無視などできようはずもない、ズッシリとした存在感。気道を遡って鼻腔に満ちる生臭さや、口一杯に広がる汗を煮詰めたような甘辛さに、生理的な嫌悪を覚える。
なのに胸は高鳴り、秘裂はますます愛蜜を滲ませて、頭の芯がカァッと熱くなった。
欲しい――しゃぶりたい。
込み上げてきた気持ちは呪によって産みつけられたものか、それとも本心なのか――だんだん区別がつかなくなってきた。
（呪だ、呪に決まっている……こんなこと、したいわけがねぇ……だろう！）
揺らぐ気持ちに言い聞かせている間にも、唇が窄まる。太く熱く硬い男根を軽く締めつ

け、縁を立てた舌をガイドレールにして、じゅじゅっと音が立つほど強く吸い込む。
「うぉッ⁉　い、いきなりか！」
突然の快感に驚いた少年が、反射的に零の頭を押さえて腰を退こうとした。
抜いてくれるなら願ってもないこと――なのに、猫目のメイドは少年の腰にしがみつき、自分から首を伸ばしてペニスを追う。
「ンちゅ……む、ンちゅっ！」
栗色の髪を揺らして頭を傾け、頬の内側のヌルヌルした粘膜に亀頭を受けて、さらに鋭く吸い立てる零。狭い口の中で舌をくねらせ、裏筋を辿る。舌の裏側をカリ首に擦りつけ、舌の先で鈴口を穿るように舐める。
「くぅ、おぉ……こ、コイツ……上手い！」
嬉しそうに呻いた少年が腰を退き気味にして、零の頭をガチッと押さえた。再び男根が、無理矢理抜け出ていこうとする気配。
「ぇあ、ン……ぷは……ンちゅ、ちゅぅうっ！」
焦ったように唇が窄まり、舌が激しく動いた。半ばほど抜け出た肉棒を弾くように舐め、亀頭の額に舌の裏側の粘膜をねちょりぬちゃりと擦りつける。
「くそう、なんていやらしいメイドなんだ……も、もうダメだ、待ちきれねぇっ！」
零の痴態に昂奮した少年が横から腰を突き出し、内側から押されてモコ、モコ、と膨ら

んでいた美少女の柔らかな頬に真っ赤な亀頭を擦りつけた。
（あ、あああああ……なんて、硬さ……）
内と外から牡肉に挟まれ、力強く揉み込まれてしまう頬。
柔肌を滑った亀頭は目尻を掠め、裏筋を擦りつけながら鋭く戻る。顔を犯されそうになった零は手を上げ、荒々しく動く男根を握った。細く華奢な指が、むくつけき淫茎にしっかりと絡みつく。
「お？　手でも奉仕してくれるのか。じゃあ、俺もやってもらおうかな」
反対側に立っていた少年がニヤニヤ笑いながら零の手首を掴み、己の肉棒を握らせた。
（そんな、そんな……アタシの手に、オチンチンが、二本も……）
込み上げてきたのは嫌悪ではなく、嬉しさ。
こんなにむくれ、こんなに熱を帯びて――細指を巻きつけ、ギュッと握り込めば、たくましい弾力で押し返してくる。
この牡は、これほどまでにアタシを欲しているのだ――そう感じ、牝の本能がどうしようもなく掻き立てられた。応えてやりたい、悦ばせてやりたい――。
（違う……違う違う、違うッ！　別にコイツらなんか、どうだっていいんだ。操られているから仕方ないんだ……アタシがしたいわけじゃ……ないんだ！）
しきりに言い訳しつつ、しかし実際には自らの意思で、掌に感じる熱い弾力をシュッシ

ュッ、シュッシュッ、としごき始めてしまう零。
淫具に掻き回されている膣も尻穴も甘やかな痺悦に埋め尽くされ、メイド服に包まれた細い腰がくねる。双穴を隔てる繊細な粘膜隔壁はグチグチと磨り潰されて、意識が白く塗り潰され、ミニスカートが閃くほど桃の実のような美尻が揺れる。
この硬さ、この熱さ、この弾力――ほかのなによりも素晴らしい。こんなに握り心地のいいモノはない、こんなに美味しいモノはない――。
気がつけば、零は夢中でしゃぶっていた。首を傾け、頭を振って、
「ちゅ……ンっちゅ、ちゅぱっ！」
湿った音を立てる。
れちょ、にちゃ、むちゅ――ちゅちゅ、ちゅぱ、むちゅぅぅ……。
己の唇が奏でるいやらしい旋律に、倒錯した陶酔感が込み上げてくる。
熱い重みに磨り潰された舌が、心地よく痺れて気持ちイイ。口と喉の境目をグポ、グポ、と抉られれば、閃く快感に胸が高鳴り、全身から甘酸っぱい牝香を含んだ汗が噴き出してきて、ジャストサイズのメイド服がだんだん苦しくなってくる。
「ンふ、ふ……むちゅ！　うぅ……ふぁ、ン、んぅぅ……」
ただでさえ大きな乳房が、淫悦に反応して一回りほど大きくなったのか――ゆさり、ゆさりと重々しく揺れる美乳の狭間、先ほどからしきりに擦れている乳谷が蒸れる。噴き出

す汗に柔肌が滑り、にちゅ、ねちゃ、と湿った音まで立ち始める。
（ああ、ああ……オチンチンが、美味しい！）
徐々に膨れあがる淫悦に、とうとう理性が駆逐された。もっと欲しい、もっともっと感じたい――ちゅっ！　ンちゅっ！　ちゅっちゅっちゅるるぅぅっ！
淫茎に絡みついた唇が、湿った音を響かせる。口と両手で三本の淫棒に奉仕しつつ、潤んだ猫目がさらなるペニスを求め、物欲しそうに周囲を見回す。
「なんだ？　まだ足りねぇのか？」
「しょうがねぇなあ。ほら、ココにもあるぞ」
気づいた少年たちがニヤニヤ笑いながら腰を突き出し、猫目のメイドの頬に真っ赤な肉瘤を擦りつけた。額にも、瞼にも、いきり勃つ男根がグリ、グリ、グリ――艶やかな栗色の髪にも、赤黒い淫棒が乗せられる。首輪をはめられたなよやかなうなじにも、滾る牡肉が押しつけられる。
「ンぁ……ンちゅ……む、ン、ぅぅうっ！」
嫌悪感はもう、欠片もなかった。
淫棒のたくましさに胸が高鳴り、頬に塗りつけられた先走り汁の生臭さ、粘り気に、身体がカァッと熱くなる。たくましい男根を何本も感じ、牝の淫欲を司る子宮がどうしようもないほど欲情し、煮え滾ったのだ。

（お、オチンチンが……熱くて硬いオチンチンが、こんなに……たくさん！）
込み上げてくる欲望に衝き動かされ、フェラを強める猫目の美少女。
「あもっ！　ンちゅ、ちゅじゅっちゅ！　ンぱ……」
すべて咥えたい、全部味わいたい――熱っぽい流し目で、穴にあぶれたペニスを物欲しそうに見つめつつ、
むちゅ！　ちゅぱ！　れちゅっ！
唇と舌をしきりに蠢かせて、湿った音を立てまくる。
純白のエプロンドレスと紺色のメイド服の下で乳房が跳ね躍るほど激しく頭を前後させ、淫茎に絡みつかせた唇を捲り返して、じゅちゅっ！　じゅちゅっ！　――喉奥から唇の裏側まで荒々しく行き来する亀頭には、唾液まみれの舌を絡め、ぶつけ、レロレロと小刻みに閃かせて、先走り汁を滲ませている鈴口を穿るように舐めまくる。
猫目の美少女の痴態に、ほかの少年たちも昂奮した。
「も、もう、我慢できねぇっ！　ここでいいや！」
ペニスを咥えた美少女の、しっとり汗ばんだ額に滾る淫棒を擦りつけ、燃えるように紅い亀頭を栗色の髪に潜らせる。エプロンドレスのフリルに切っ先を押しつけ、あるいはミニスカートの裾を捲ってペニスを包み込み、己の手でしごく。
「ンぇあ？　ぇあ……むちゅ、ちゅっ！　ンっちゅぅううっ！」

牡肉の熱さ、硬さに昂奮し、射精を予感する零。
（精液、精液……熱くてドロドロした、ネチャネチャした、臭い……精液……！）
咽ぶほどの精臭、肌に貼りつく熱い粘り気――想像しただけで、頭が真っ白になった。
胸は高鳴り涎は溢れ、全身から牝香を含んだ汗が噴き出す。
「ンちゅっ！　ぇも……むちゅ、ちゅっ！　ンっ、んっ、ンぁ……ぇも……ッ！」
膝立ちになった身体を震わせ、ミニスカートに包まれた尻を振って、絶頂への坂道を駆け足で登り詰めていく。
自ら頭を振り、滾るペニスを喉奥まで導き入れて、ぬぶちゅ、くぶちゅ、くぷぷッ！
淫らな口唇奉仕を祝福するように、膣と尻穴を犯した電動淫具も動きを強め、零の肉芯に甘やかな激感を刻み込んで――。
（精液、欲しい……来て……来てッ！　アタシの中に、アタシの外に……みんなの精液を、ビュク、ビュク……してぇえっ！）
零の心の叫びに合わせるように、手の中で、口の中で、頬やうなじ、髪の上で――少年たちの淫棒がミチミチと膨れあがった。
「ン……ぷはっ！　は、あ、あああっ！　来て来て、らしてぇえっ――――ッ！」
絶頂に達し、背筋を反らせてビククッと震える、猫目の美少女。
その栗色の髪に、蕩けた顔に、男根に蹂躙されて甘く痺れきった喉奥に――びゅくっ！

びゅぱぱっ！　どぴゅゅッ！　びゅるるっ！
群がる男根が競うように、一斉に射精。
「あ、はぁ……」
恍惚に弛んだ頬に、鼻に、唇に――メイド服の肩に、胸に、エプロンドレスに――。
べちゃっ！　ねちょっ！　べちゃちゃっ！
青臭く香る大量の白濁液が、驟雨（しゅうう）のように降り注ぐ。
鼻奥をつき、脳髄を痺れさせる、強烈な精臭。肌に貼りつき、毛穴から染み込んでくる、熱い粘り気。
「せいえき……せいえきぃ……こんなにたくさん、せい、え……きぃ……」
どろりと垂れる大きなダマに瞼を塞がれながら、零はうっとりと微笑んだ――。

＊　＊　＊

――どれくらい、経っただろう。
「う……あ……？」
気怠く心地よい微睡（まどろ）みからゆっくりと目覚めた零は、なにやら粘つく頬を無意識に拭いつつ、ノロノロと身体を起こした。
なにがあったのだろう？　ここはどこなのか？　鼻を突くこの青臭さはなんだろう、髪や頬に粘ついているこの粘液は、いったいなんなのか――。

『第六章　洗脳』より

「え？　えっ⁉　ま、まさか……やめて、やめてやめて、佐々木さ……ぁああっ！」
ズ、ズ――ズズンッ！
微かな捻りを加えつつ、力任せに刺し貫く。
白魚のような細指は、紅く染まった菊膜にたっぷりまぶした唾液に滑り、苦もなく根元まで潜り込んだ。ねっとりと絡みついてくる、熱く濡れた排泄粘膜。異物の侵入に反応した括約筋が、慌てたように、必死に締まる。
「おっと、簡単に入っちまった。イヤがっている割に、ずいぶんと慣れてるじゃねぇか」
「な、慣れてなんか……はぅ⁉　あ、くぅ……ッ！」
反論を許さず、挿し込んだ指をヌヌ、ヌヌ、と上下に動かす零。間を置かずに出入りする指節が、羞恥に緊張している括約筋をじっくり揉み解していく。
「やめて……イヤ……そんなことされたら、お、お、お尻の、穴が……」
不浄の肉穴を抉られるという恥辱のせいか、それとも肛悦を感じているのか――御影の声に力がない。しゃがんだ零の目の前で緋袴に包まれた尻が、抜き差ししている指の動きに合わせてゆっくり大きく円を描く。
「ママぁ、あのお姉ちゃん、なにしてるの？」
「あれはねえ、お尻の穴を穿られて、気持ちよくなっているのよ」
無邪気な親子の会話が聞こえると、御影は唇を噛み、全身を強張らせて腰の捻れを止め

た。が、長くは続かない。
ぬぽ、ぬぽ、ぬぽ――。
零の細指が菊膜を捲り返し、押し込んで、また捲り返しているうちに、
「ふ……あ、うぅぅ……」
甘い吐息が再びこぼれ、尻がビクッと跳ねた。大きく裂けた緋袴の股間、艶めかしい桜色に染まった肉畝を見せびらかすように腰が前へと滑り、最前列に陣取っているいやらしい少年たちに絶好のシャッターチャンスを与える。
「くぅ……うぅ……」
小さく呻く朱唇は野苺のようにプクッと膨れ、俯いた頬は熟れ柿のように紅く染まり、喘ぎに合わせて揺れる巨乳はほんのり桜色に上気して――たわわに実った乳房の尖端、野次馬の視線を集める乳首も、痛いほど硬く勃起していた。緋袴の股間に開いた穴の奥では赤ん坊のようにツルンとした肉畝が艶やかなピンクに染まり、少しずつ厚みを増す淫唇に押し分けられて、淫らな割れ目を開き始めている。
「すげぇ……尻穴で感じる女って、本当にいるんだ……」
「あんなに綺麗なのに、変態なのね。可哀想……」
いやらしい忍び笑いを含んだ、侮蔑の言葉。
「違う、違う……違うぅぅ……！」

恥辱に打ちのめされた御影は真っ赤に染まった顔を俯け、イヤイヤと首を振った。長く艶やかな黒髪が揺れ、肩を滑り落ちた一房の髪が弾む巨乳の側面を包み込んで、さわ、さわ、さわ、と撫で回す。

「だんだん柔らかくなってきたぞ。もういいかな？」

薄く笑った零が、羞じらう巫女の尻穴から指をゆっくり引き抜いた。

ぬ、ぬぬぬ――ぬぽ！

抜け出ていく細指に未練がましく絡みついていた排泄粘膜が、湿った音を立てて捲れ返り、尻の真ン中に紅くヌラヌラとした小さな肉華を咲かせる。

「な……なにが、もういいの、です？　あ……ッ⁉」

手首から鎖が解け、驚く御影。しかし足首に絡みついた鎖はそのままだから、バランスを崩し、その場に四つん這いになってしまう。

まっすぐに伸ばした腕の間、はだけられた上衣からこぼれ出た乳白色の双球が、淫らな汗にしっとり輝きつつ小気味よく弾む。ただでさえ大きな柔肉の塊は重力に引かれてさらに大きさを増し、赤々と輝く勃起乳首が地面に擦れそうになる。

左右に引き開かれた脚は、元のまま。緋袴を穿いた脚は肩幅以上に開き、膝をついて尻を浮かせた恰好に。しかも――。

「うっ⁉　こ、これは……地霊ッ⁉」

地に着いた指の間からニュルニュルと、泥でできた触手が這い登ってきた。猫目の呪術師に召喚された、低劣な魔物だ。

慌てて縮めようとした御影の腕に、いやらしくぬめる触手が蛇のように絡みつく。手首をきつく締め、細指を広げさせて、地面に掌を着けた姿勢を強制する。

「くぅ……ッ！」

せめて胸だけでも起こそうと、必死に顔を仰向け、もがく巫女。

その、地面に擦れそうになっている美乳のすぐ下に――ぞわ、ぞわわ！

妖しい波紋が生まれ、みるみるうちに泥溜まりが広がる。粘り気のある泡が膨らみ、弾け、そのたびに、ミミズのように濡れ光る暗褐色の触手が何本も、何十本も、くねりながら伸び出してくる。

丸くて冷たい尖端に、プニプニと圧される乳房。

感じやすい乳首が弾かれ、突かれ、せせられる。

「ひ、非道いですわ、佐々木さん！　こんな、こんな……き、気持ち……悪いッ！」

冷たく濡れた、死人の舌のような感触に、四つん這いになった御影が悲鳴を上げる。胸の下で大きな乳房が弾み、揺れて、群がる触手を払い除ける。

「ジッとしてたほうがいいぞ。そいつらは、お前の穴を犯すためだけに作ったんだからな。抵抗しなければすぐに済む……が、お前が暴れるなら、いつまでかかるか分からん」

「そんな、滅茶苦茶な……くぅッ⁉　うぅっ！」
零に対する反論を途中で止めて、緋袴に包まれた桃尻を突き上げる黒髪の巫女。胸の真下から生え出してきた無数の触手が乳房のあちこちに触れ、ぬちょ、ねちゃ、と冷たい粘液を擦りつけたのだ。
「ひぃっ⁉　あぅ……や、ぁあっ！」
濡れた肉紐に乳肌を嬲られるたび、御影は長い髪を振り乱し、乱れた胸元からこぼれ出たたわわな乳房を激しく揺らして、細い腰をくねらせる。
おっとりとした頬は羞恥に火照り、黒目がちの瞳が淫悦に潤む。はね上がる顔、わななく唇。ときおり漏れる鳴き声は恥ずかしそうに震え、上擦り――羞じらい悶える美女の姿に、野次馬たちの欲望がさらに掻き立てられた。
「畜生、ココからだとオッパイがよく見えねぇ！」
「尻、どうなってるんだろう……ウンチの穴も喘いでいたりして」
それぞれのベストアングルを求め、ブランコの周りに広がっていく。
「うぅ、ああ……見ないで、見ないでッ！　やめて、佐々木さん……わ、私への復讐ならいくらでもしていいから、このヒトたちを追い払って！」
耐えがたい恥辱に負けて、ついに御影が交換条件を出してきた。
だが、もちろん零は聞く耳を持たない。

「ジョスリン様もそう言っていたはずだ。しかし、お前と透基はやめなかった――だからアタシも、絶対にやめない」

薄笑いを浮かべた呪い屋が、二枚の呪符をフワッと投げた。風に煽られた短冊は、四つん這いで顔を赤らめている御影の頭の先と尻のうしろに、何気ない様子で落ちて――みるみるうちに地に溶け込み、新たな泥溜まりを創る。

「な、なにをしたの？　これ以上、なにを……あっ⁉　ひ……ひぃっ！」

真っ青になって叫ぶ御影の鼻先、大きな泡を弾かせて沸騰し始めた泥溜まりの中から、無数の触手が這い出してきた。溶けたチョコレートのようにドロドロとした、茶色い滴を垂らしてくねる妖蛇の群れ。

鎌首をもたげた尖端から粘液が滑り落ちると、不気味に透き通った飴色の亀頭が現れた。雄々しくエラを張り出した、立派な亀頭だ。それだけならまだしも、クサビ型の表面に目玉のようなコブが浮き、揺らぐ肉紐には無数のイボが互い違いに生えてくる。

「く……う、ンぅッ⁉　んん、んん……ぷはっ！」

背ける顔にヌチュヌチュと、異形の亀頭が擦りつけられた。蒼褪めた頬に、震える顎に、冷たくぬめる粘液が塗り広げられる。

「尻はあんまり振らないほうがいいぞ。そいつらは、野次馬の欲望に反応して成長する。オアズケされている観客の、ああしたいこうしたいっていう想いを現実化するんだ」

「ッ⁉　そ、そんな……あっ⁉　だ、ダメ……そこはッ！」
ハの字に開いた脚の間からニョロニョロと伸び出していた飴色の触手が、緋袴の穴を見つけ、いやらしい粘液に濡れた亀頭を殺到させた。
「お尻、ダメ……お尻は、あぁ……ッ！」
冷たく硬い弾力が尻肉を揉み、浅い谷間を掻き分ける。少し前まで零の細指に弄られていた肛門に、濡れた塊が押しつけられる。
細かな皺に擦り込まれる、冷たい淫液。
土色の亀頭には蛙の目のような小さな瘤が突き出し、必死に閉じようとしているお嬢様の尻穴をグリ、グリ、と穿る。
地霊が狙うのは、尻穴だけではなかった。
腕の間で揺れている乳房にも大小の亀頭を擦りつけ、ムニムニと突き歪める。紅く色づいた乳首にも先の丸まった細い触手が群がり、つけ根や側面、乳頭に尖端を押しつけて、力強く小刻みに震える。
「あぁぁぁ、あぁあああ、あぅ、あぅ……ああああっ！」
痙攣性の声を漏らし、真っ赤に染まった顔をはね上げる御影。いやらしくくねる飴色の触手を振り解こうとして細い腰を捻り、くねらせ、腕の間に実った巨乳を激しく揺らす。緋袴に包まれた尻を上下に弾ませ、左右に振って――。

だが、必死になればなるほど触手たちも活発になる。周囲を取り囲んだ観客が、牝犬のように尻を振る黒髪の巫女に昂奮し、その欲望を受けて地霊が力を増し――。
「くそぉ……緋袴が邪魔だな」
誘うように揺れている美女の尻のうしろで、野次馬のだれかが呟いた。
その意思を受けて飴色の肉紐が鞭のようにしなり――。
パァンッ！　ピシッ！　パシッ！
「ひっ⁉　あ……い、痛ッ！」
桃尻を打擲（ちょうちゃく）され、顔をはね上げる黒髪の巫女。
衝撃に反り返るしなやかな背のうしろでは緋色の布地が裂け、破れ――瑞々しく輝く大きな美尻が丸く剥かれ、ムチムチとした乳白色の果肉を露わにする。
「お、見えた見えた。思ったより、大きな尻だな。安産型ってヤツか」
無邪気に悦ぶ野次馬たち。
欲望はさらに膨らみ、妖しくくねる飴色の触手が御影の秘裂へ殺到する。
「うっ⁉　あ、ああっ！」
肉畝を圧し歪める、人差し指程度の太さの冷たい弾力。ひとつだけではない。ふたつ、みっつ、よっつ――左右に分かれ、次第に圧力を高めて、
「ヤダ、ダメ……開かないで、開かないでぇえっ！」

哀願虚しく、桜色に火照った肉畝がヌパッと割り開かれた。
弾けるように飛び出す淫唇、潤みの底に姿を現してしまう小さな膣口。
いつから焦れていたのか、巫女の秘裂は燃えるように紅く、甘酸っぱい蜜に濡れてヌメヌメと輝いていた。あられもなく咲きこぼれた粘膜花弁は襞が薄く、大人びた外見の割には幼気だが、淫熱に蒸れて感度を増し、プクッと厚みを増している。
もちろん、ただ開いただけでは済まされない。
「太腿が邪魔で、オマンコが見えねぇなあ」
野次馬たちのいやらしい意思を受けた触手が蛇のようにくねり、もがく巫女の脚にニュルニュルと巻きついた。
「あ、あ……なにするの、やめて、やめて……やめてぇえっ！」
全身を揺さぶって抵抗するのに、緋袴を穿いた脚が片方だけ吊り上げられ、小便をする犬のような、恥ずかしい姿勢に。
「おお、見えた見えた。うはぁ、もうヌチャヌチャじゃねぇか！」
「ビラビラが、あんなに開いて……見てよアレ！　エッチな穴がヒクヒクしてるわ！」
身を乗り出した少年少女が指差す先で、御影の割れ目はあられもなく口を開いていた。
透明な粘液に濡れた紅い肉ビラは浅ましいほどに花弁を広げ、まるで水飴を垂らしたカトレアのような――柔肉の端にはクリトリスが膨れ、肉色の真珠のように艶々と輝いている。

『第七章　処刑』より

あまりの快感に舌が縺れ、悲鳴が甘く蕩けてしまった。割れ目に溢れた淫悦は逆さになった背を駆け降り、あるいは左右の尻房へ染み広がって、太腿の瑞々しい柔肌に、艶めかしい桃色の火照りが広がっていく。

マングリ返しにされた背筋が鋭く捩れ、真上を向いた美尻が右へ、左へ――悶えているのは、身体だけではない。入り口付近の悦びに膣洞が呼応し、細かな襞を立てた肉穴がギュウッと絞れる。

――コポ、コポポッ！

窄む膣口から甘酸っぱく香る恥蜜が噴き出し、少年たちの蠢く指先にクチュネチョと掻き回されて、いやらしい肉華がさらに熱く潤んでしまう。

「なにがダメなんだ？　んん？」

跳ね躍る桃尻の真後ろに陣取った少年が、中指を一本だけ立てた。指先を下に向け、

「穴に挿入れてくれないとイヤってことか？」

ずぶちゅっ！

「ふはッ⁉　あ、あ……あぅうっ！」

武骨な指にしごかれた蜜壺の口に、微弱電流が渦巻いた。撓められた背筋がビクンと跳ね、群がる男たちを撥ねのけそうになる。

「おお、締まる締まる。熱いヌルヌルが、こんなにしっかり絡みついてきた。お？　ほら

見ろ、コレ。オマンコが、俺の指をしゃぶってやがる！」
「うはぁ、本当だ。勝手に蠢いてる。必死に吸い込もうとしてるんだな」
猿のようにはしゃぐ少年たちの目の前で、
――ちゅ……じゅちゅ！
器用に伸縮する零の膣穴が淫らな音を立てた。透明な汁に濡れた紅い粘膜が、太い指に巻きつき、締めつけ、奥へ引き込もうと一生懸命蠢く。
「正直に言え。挿入れてもらえるのならなんでもイイんだろう？」
「ち……ちが、ああ、あ……うぅぅっ！」
アタシは青龍様のペット、青龍様のオチンチン以外はイヤだ――そう言いたかったのに、言えない。つけ根までねじ込まれた指が、軽い捻りを加えつつ、ずちゅ、ずちゅ、と抜き差しされ始めたからだ。
「ひぅ、あぅ……にゃぁ、うぅぅンッ！」
上下する指に絡みつき、あられもなく捲れ返ってしまう壺口。出入りする指節に括約筋が揉まれ、鉤に曲がった指先にクリトリスの裏側、Gスポットをしごかれて、津波のような肉悦が次から次へと湧き起こる。
「ほらみろ、可愛い声が出たじゃねぇか。これでもまだ違うって言うのか？」
「やぇ、やぇ、やぁああ……ッ！」

舌が縺れ、喉が蕩けて、イヤだと言うことができない。
ヌポヌポ鳴らされている膣穴だけでなく、無数の指に揉み捏ねられた肉畝も、滅茶苦茶に弄り回されている淫唇も、甘やかに痺れきってしまった。
仰向いた尻から先、ハの字に開いて頭の左右に引き伸ばされている脚の感覚が、すでにない。あまりに気持ちよすぎて頭の中が真っ白になり、自分がどんな姿勢になっているのか、どこまでが自分の身体なのかすらも、だんだん分からなくなってきた。
悦びは、膣だけではない。
仰向き揺れる桃尻に男の指が近づいて――ぬちゅ、ぴちゅっ！
「ひ……ひぁっ⁉　らぇ、らぇらぇ、そこは……らぇえっ！」
生温かな粘液を擦りつけられたのは、尻穴。自らの指で触れるときでさえなんとなく恥ずかしくなってしまう、穢らわしい排泄器官――それを、いま、見知らぬ少年にまさぐられている。小さな円を描く指先に、菊の蕾のような形を織りなしている細かなヒダヒダが押し伸ばされ、しごかれ、揉み込まれ――。
にちゅ、ねちょ、と塗り広げられているのは、自分の愛液か。
（こ、こんなに、溢れて……こんなに、ヌルヌル、して……ああ、お尻が……う、ウンチの、穴、が……熱い、溶けちゃう……蕩けちゃ、うぅうっ！）
顔から火が吹きそうなくらい、恥ずかしい。

そしてそれ以上に、気持ちイイ。
「あは！　見てよあの顔。お尻の穴を弄られてうっとりしてるわ」
「当たり前でしょう？　ほら、開発済みって書いてあるわよ」
野次馬に混じったＯＬの、聞こえよがしの会話。
（ち、違う……開発なんて、されて、ない！）
頭では思うが、愛液を擦り込まれてぬちゅりくちゅりと鳴り始めた肛門が甘く蕩けているのは事実だ。丁寧に愛撫された括約筋は心地よい熱を帯び、はしたなく弛んで――ぬ、ぬぬ、ぬぷぷ！
「ふぁ……あ、あああ……ッ！」
刺し貫かれた尻穴が心地よく痺れ、マングリ返しにされた下半身の感覚が消える。
（イヤだ、イヤだ……尻で気持ちよくなるなんて、恥ずかしいッ！）
どんなに羞じらっても、肛悦は消えてくれない。
淫悦に目覚めた排泄器官は武骨な指をキュッと咥え、締めつけて、
「うは、もうしゃぶってきた！　コイツ、ホントに痴女だな！」
下品な少年を悦ばせてしまう。
と同時に、
「見ろよ、コイツの膣穴！　ケツの穴に指を突っ込まれてヒクヒクしてるぞ！」

潤んだ花芯を示した指が、そのままヌプッ！　と挿し込まれた。
「はぅ……ッ！」
今度の指は、二本。
すでにじっくりヌポヌポされたあとだから、壺口には激感が炸裂。
マングリ返しにされた細い身体が、ほぼ真上に跳ねる。
それは当然、少年の指に自らの穴を押しつけるような動き。
じゅじゅちゅ――と卑猥な音と愛蜜の泡を吹いて、零の膣穴はゴツゴツした指を根元まで咥え込んでしまった。尻穴に潜り込んでいた指も、排泄器官の中へ一気に侵入。硬い指節に揉みまくられ、前後の括約筋に甘やかな電流が往復する。
しかも――すぐに腰が落ちる。
指とふたつの淫穴が、逆方向に動く。
「あ、あ、あああっ！」
抜け出ていく指に絡みつきかけていた膣穴が、あられもなく捲れ返った。尻穴も掻き出され、桃尻の真ン中に小さいが艶やかな肉華が咲きこぼれる。
壺口と菊膜に鮮烈な感覚が弾け、入り混じり、悦びの衝撃波となって背を駆け抜けた。
「ああ、やら……いやぁあっ！　かららが、かって……にぃいっ！」
震える声で叫びつつ、零は再び尻を突き上げ――落とす。

押し込まれ、捲り返される膣と肛門。そのたびに閃く快感に追い立てられて、窮屈な姿勢に折り畳まれた身体が激しく細かく上下に動く。

「うわぁ……なんていやらしい女だ。自分の穴を指に擦りつけてるぞ！」

「指でコレだと、チンポを挿入れたらどうなるのかな？」

少年たちに嘲笑われても止まれない。むしろ逆に、恥ずかしさに追い立てられて、ますます激しく跳ねてしまう――と。

（あ……？　な、なに……なにが……あああ⁉）

蕩けた瞳に映る少年たちの顔が、不意に歪んで見えた。いや、実際に歪んでいる。顔だけではない。身体も厚みを増し、制服を引き裂き袖を破って、腕や肩に隆々とした筋肉が盛り上がる。

「う、あ……ああっ⁉　そんな、そんな……あああ……」

驚き見開かれた猫目の前で、尻や太腿に感じている手も熱さを増し、硬さを増した。武骨な指がどんどん膨れ、尖端に真っ赤な肉瘤を生やし――蛇のようにくねる、男根のような触手に変わっていく。

おぞましい変化なのに、驚いているのは零だけだった。

「あは、すごぉい！　あんなに太いオチンチンが、ウネウネしてるわ！」

羽賀の呪いに囚われた野次馬は、男も女もいやらしい笑みを深める。歪んだ歓声を上げ

て、ますます昂奮していく。
（やだ、やだやだ……怖いっ！　助けて、青龍様ぁああっ！）
羞恥に加え恐怖まで覚えているうちに、少年たちはすっかり化け物になってしまった。
肉色の、ブヨブヨした塊。
額も頬も大小のコブに覆われ、元の顔がどうだったか思い出せない。体型も身長もまるっきり変わり、それどころかヒトの形すら失って、猫目の少女の裸体に熱く柔らかな肉塊をしきりに擦りつけようとする。
にゅる、にゅるる――指から変化したペニス状の触手が蛇のようにくねり、手足に絡みついてきた。柔肌に擦り込まれる、生温かな粘液。小さな亀頭をときおり立てて、膝裏や内腿、腋の下など、柔らかくて敏感な部分に鈴口を擦りつけてくる。
「うぅ、ああ……とって、とってとって、やらぁあっ！」
「どうした？　呪術師じゃないのか？　これくらいの魔物、サクッと始末してみせろよ」
「まあ、お前みたいな三流では、呪に囚われていなくても無理だろうけどな」
気味の悪い触手が柔肌の上で震え、悶える零を嘲笑った。
「ひ……ひぃっ！」
顔に迫る亀頭。頬に擦りつけられる先走り汁。
逆さになった身体を揺らし、必死になって逃れようとすればするほど、無数の肉紐はさ

らにきつく巻きついてきた。
ぎゅち――ぎゅちちッ！
ほどよく括れたウエストが、二重三重に締め上げられる。腕から肩へ這い登ってきた触手は、左右から寄せ合わされた乳谷へ、尖端の硬い肉瘤をねじ込んでくる。
落書きだらけの柔肌に擦りつけられる、雄々しくエラを張り出した亀頭。指よりも、本物のペニスよりも硬い。
「やら……やらやら、やらぁああっ！　きもち、わるい、よぉおっ！」
あまりの恐怖に幼児退行を起こし、必死にもがく猫目の少女。
しかし、マングリ返しにされた身体が倒れそうになると、くねる肉蛇たちが無理矢理押し戻す。腕や太腿をさらに強く締め上げ――真上を向いた尻穴や秘裂に数十本の触手が群がって、真っ赤な肉瘤がひしめき合う。
「ふひっ⁉　あ、あぅうっ⁉　おまんこ、おまんこが……やぁ、うぅうっ！」
感じやすい粘膜花弁がいくつもの小さな亀頭に挟まれ、クチュクチュと掻き鳴らされた。気持ち悪いのに、イヤなのに――おぞましさが吹き飛ぶほどの快感が、蜜まみれの秘裂に次々と爆発。
「はぅうう、あぅうう……あッ⁉　あひ……あ、あにゃぁぁあっ⁉」
膣穴に深々と潜り込んだ触手が、いきなり小刻みに震え始めた。磨り潰される膣襞、突

きまくられる子宮口。
それだけなら、歯を喰い縛って耐えられたかもしれない。
しかし――触手に変化して自由度を増した男の指は、ブンブンと振動しつつ前後し始めた。硬く張り出したエラが膣襞を捲り返しつつ、肉壺の縁まで素早く戻る。
ぐちゅぽっ！
捲れ返る壺口から、掻き出される愛液。
「にゃぅうンッ！」
秘裂に発した激感に喘ぐと、今度は細かな粘膜襞をプチプチ圧し潰しつつ、たくましい亀頭が腹の奥底へ――ぐちゅちゅ、ぐちゅっ！
「ふぁ、あ、あああっ！　おちんちんが、おちんちんがぁぁっ！　おにゃかのにゃかれ、ぶんぶん、し……ちぇ、るぅううっ！　ヘンなの、ヘンなのぉおっ！」
子宮口を突きまくってくる衝撃とは別のリズムで、子室が激しく揺さぶられていた。直腸に潜り込んだ亀頭つきの肉紐が、小刻みに震え、ウナギのようにくねって、牝の肉悦を司る子宮を裏側から揉み立ててくるのだ。
「あちゅぃ……あちゅぃぃぃっ！　おにゃか、もえ、りゅぅううっ！」
牝の官能を司る肉室を滅茶苦茶に突きまくられ、身体の芯に悦びの炎が燃え盛る。弾ける悦び、駆け抜ける快感。マングリ返しにされた身体が鋭く跳ね、捻れ、暴れた手足が絡

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!
◎期間限定で、文庫お買い上げの方に**オリジナルブックカバー**をプレゼント!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!